

## 全体討論

パネラー：リラ・ムカージー  
          ディン・スアン・ラム  
          楊    彪  
          松本 通孝  
          車    周昊  
          田中 正敬  
司    会：内藤 雅雄  
          飯尾 秀幸

**内藤**：田中さんの先ほどのコメントは、その中で最後にまとめられた二つの問題、フランス革命の性格や主体がどう描かれているのか、それからそこでいったい何が強調されていたのかという問題と、もうひとつは教科書の記述の中でフランス革命の歴史的背景や現実の背景というものが教育の場でどういう風に取り扱われているのかということ、そして今後の課題が指摘されていたように思われます。最初に、ご報告された5人の先生方に田中さんのコメントについて異論があればそれを出していただき、報告の中で触れられなかったことについて短く触れて頂きたいと思えます。それに関して私の方から一つお願いしたいのは、ムカージーさんの報告で、時間の関係上、インドにおける高等学校や大学、大学院教育でフランス革命がどのように扱われているかについては昨日のお話の中であまり触れられなかったように思われます。それについて簡単に触れていただければと思います。それではまずムカージーさんからお願いします。

**ムカージー**：まず私が指摘したい点としては、他の4人の方の報告にも出てきたのですが、インドの教科書の状況はそれ程政府によって規制されたものではなく、非常に自由な市場であるということが私の報告ではそれ程触れられていなかったかもしれません。他の方々の報告を伺っていて、インドは教科書の上でそれ程規制されていない、それを申し上げたいと思います。それからインドには言語の政策という特殊なものがありまして、特に私の出身地、西ベンガルにおきましてはたくさんの方が使われております。英語は後の段階で教えられるという事情があり、教科書を作るということになりますと常に色々なもの、フランス語のものはともかくとして、英語のものを翻訳しなければならず、政府の翻訳が間に合わないという状況です。それから公式な教科書というのはしばしば陳腐化しており、古いものです。そういうことを述べた上で申し上げたいのは、フランス革命の教育というのはインドにおいては、昨日の報告でも申し上げたのですが、歴史の教育の中ではごく小さな部分しか占めない、あまり大事な部分ではないということでもあります。

19世紀において、民族的な運動がイギリスに対して起きたときに、国家のリーダーたちのなかでヘンリー・ビベンジ・ロジオ、それから1830年代にベンガルのルネサンスを率いたラム・ホンドレイこの二人の名前を挙げたいのですが、彼らは常にフランス革命を研究し、フランス革命の精神について言及したのです。ラムフェラル・タガルの著作の中でフランス革命についての言及があり、それからネルーも多く述べておりますし、さらにガンディーもガンガアもそうです。これは19世紀、20世紀初期のことです。1947年にインドが独立したとき、特に申し上げたいのはインドが非常に貧しい国であり、惨憺たる状況にあったことです。ただインドは植民地の中では非常に裕福であったということでプライドは大いにありました。革命のモデルというのは平等とか自由ではなくて、国家の再検討であったわけです。そういうことからロシアの革命についてより多く考えられたのです。インドの大学、大学院レベルで教えられたのもロシア革命です。そして1950年代、1960年代以降、中国の文化大革命、毛沢東の実験などについての教育があり、フランスへの抵抗運動も教えられました。ですから帝国主義に対する抵抗がむしろ強調されたわけがあります。現在高校ではフランス革命が教えられますが、原因と結果のみが叙述されているに過ぎません。大学・大学院レベルでは中国、ロシア革命が教えられます。16単位の内、例えば私の大学では4単位がロシア革命、2単位が中国、1単位が日本ということになっています。そういうことを申し上げて、昨日の報告の明確化をはかりたいと思います。ありがとうございました。

**内藤：**どうもありがとうございました。引き続きラム先生お願いします。

**ラム：**田中先生の先ほどのコメントを聞きまして少し意見を申し上げたいと思います。まず田中先生に御礼を申し上げたいのは、私の報告原稿をうまくかいつまんで説明して頂き皆さんの報告の中に位置づけて頂けたことです。最初に申し上げたいことはヴェトナムにおけるフランス革命の教育方法についてです。強調したいことはヴェトナムにおけるフランス革命の教育はヴェトナムのフランス占領時代から現在まで連続しているということです。昨日も申し上げましたように、フランス植民地時代におきましてもフランス革命史というものが教えられていました。当然、1945年以前のフランスによる占領時代もフランス革命の教育を受けてきました。その当時は歴史の各段階について最低限のことを学ぶことが出来ました。それはフランス語で書かれたフランスの教科書によってフランス革命を学ぶということでした。現在ヴェトナムにおいてはフランス革命史の教育は中学校から始まります。また師範大学ではフランス革命の教育方法を教えております。特に大学などの高等教育におきましてはフランス革命の進歩的な考え方、つまり民主的性格や反封建的な性格を強調しています。とくに民主的な思想を強調しております。また祖国防衛戦争においてはフランス人民の愛国的な思想が強調されています。しかし、フランス革命にはいくつかの限界や問題もあるということがわかっております。例えば女性差別問題や黒人問題または人民の土地所有問題というものに関しては未だ制限を残したままであったと思います。そういう問題がありますけれども、フランス革命の思想は非常に重要だったと思います。ですから私の昨日の報告では現在のヴェトナムの青年に対するフランス革命の精神の影響を強調したつもりです。フランス革命の良い点を強調します。現在の教育の中で強調していることは民権運動と人権問題、そして近代化という一つの流れが密接に関係しているということです。フランス革命の良い点がお互いに関係しあっています。現在のヴェトナムが目指しているのは民主的で平等で文化

的で強く豊かな国を設立するという事です。ヴェトナムの政策は革新政策です。その中では外国との交流や良いものを取り入れるということを重視しています。特に外国の良いものをヴェトナムの伝統社会の中に生かしながら取り入れていくという方法をとっています。最後にフランスの進歩的な思想を現在の学生に教えることによって新しい世界を建設していきたいと考えております。以上です。

**内藤：**どうもありがとうございました。それでは楊さんお願いします。

**楊：**先ほど田中先生にコメントを頂きましてありがとうございました。いくつか私の方から簡単に触れたいと思いますが、中国の歴史教育におけるフランス革命は共産党政府が権力獲得を正当化するために利用されたという経緯があります。西側から見てもこれは正当化されるのだということを主張したかったということがあります。西洋社会の人たちそして日本の人たちは、フランス革命を単にフランス革命と呼ぶでしょう。しかしながら中国はフランスのブルジョワ革命という言い方をしました。この歴史的事象を説明する上でブルジョワ革命という表現をしたのです。初めてそういう言い方がされたのはスターリンが1934年だと思います。スターリンはフランスのブルジョワ革命という表現を使いました。ソ連の例にならって中国も中華人民共和国の成立後その表現を使ったわけです。今では、中国の歴史教科書においてはブルジョワ革命ではなくフランス革命という言い方をしています。これは大きな変化だったと思います。もうひとつ触れたい点があります。中国の印象では、中国はどちらかといえばフランスに似ていて、日本はドイツに類似しているということが言えると思います。革命前の中国もフランスも非常に強い中央集権化を体験しています。そして重農主義を体験しています。日本と違って中国はその歴史において非常に強い中央集権化を推進してきました。日本は島国であり、外部からの軍事的な侵略についての教育は中国に比べれば大いに少ないわけです。中国におきましては常に外部から攻撃を受けてきました。中国の歴史は強い中央集権化を必要としたのです。日本はそうではありません。日本は分権化の方が中央集権化に比べればずっと有効なのです。中国の印象では、日本の明治維新はイギリスの革命と同様平和裡に行われ、社会はそれによって大きく変化しました。こういうわけで、中国の革命はフランスの革命に類似しているわけです。日清戦争も、プロイセンとフランスの普仏戦争にたとえることが出来ます。中国はそういう理解の仕方を近代史について中国はしておりますし、フランス革命についてもそのような理解をしています。

**内藤：**どうもありがとうございました。続いて松本さんお願いします。

**松本：**田中先生の方から素晴らしいまとめをして頂いたのですが、それにお答えするというのはまた非常に大変な感じが致しております。昨日は戦前と戦後の教科書を中心に報告させて頂きましたが、そのなかで触れられなかったことがありますので補わせて頂きたいと思います。ひとつはフランス革命を教えるに際しまして私たち歴史の教師の立場と政府の立場、それからフランス革命研究の研究者の立場というのはそれぞれ若干違っていると思います。一つ目の政府に関してですが、日本には学習指導要領というのがあります。その中にどういう事が書いてあるかと申しますと、指導要領の解説編という細かい文章があるのですが、そこでは一つはアメリカ合衆国の成立やフランス革命、ラテンアメリカ諸国の独立については環大西洋の啓蒙世界で起こった一連の政治的変動と扱ってほしいということ、そしてこれにより、西ヨーロッパとアメリカ合衆国に

市民社会が誕生したという事を強調して欲しいと書かれています。それからフランスでは国民国家が形成されたこと、さらに反ナポレオン運動の中で芽生えた国民主義はウィーン体制下で自由主義とともに高まりを見せ、ドイツ、イタリアなどで国民国家の原動力になった事を生徒に把握させて欲しいと。この文章によって教科書がつくられているわけです。教科書を作る側からしますとこれに厳密に従っているわけではありませんが、政府側としましてはとにかくフランス革命に関して、市民社会がそれによって成立したということ、それから国民国家の形成において非常に重要な役割をフランス革命が果たしているということを生徒に教えて欲しいということだと思います。それに対しまして、フランス革命史研究の側、私は研究者ではありませんのでよくわかりませんが戦後、高橋幸八郎先生、柴田三千雄先生、遅塚忠躬先生等々によってフランス革命史研究がリードされてきたと思いますが、その成果が直接教科書に反映されているかといいますと、大きな流れとしては反映されてきていると思います。しかしいずれも非常に遅れて研究成果が発表されて、教科書が変わるまでには相当の時間がかかっているように思われます。民衆運動の役割にしましても、社団国家等々に関しましても非常に遅れて教科書に反映されてきていると思います。特に修正主義の問題等に関しましては、現在の日本の教科書にはほとんど反映されていないのではないかなという感じが致しております。そういう中で、私たち歴史教育に携わっている教師が、日々の教育で、実際にはフランス革命に何時間くらいかけるかといいますと、フランス革命とナポレオンあわせてせいぜい4時間から5時間。その中で非常に細かい内容をどうやって生徒達に理解させるかというのに苦勞しております。その中で私たちに研究の側から提起されている問題をどういう形でその中に盛り込んでいくかというのが現実の教師の苦勞になっていると思います。現在でもやはりフランス革命が持っている普遍的なものというのはすばらしいものがあるとは思っております。ただ、それだけではうまくいっていない様々な現実的問題というのが世界の至る所で起きていると思いますので、その問題をあわせて語るという形で、フランス革命の授業を行っているというのが現状であります。ちなみに日本では世界史は高校生では必修になっております。それでAとBというのがありますが、Aでは週2時間、Bでは週4時間という形になっております。ただ現実の授業ではやはり受験ということを考えますと週4時間ではとても教えられません。ですから、実際には6時間あるいは8時間やっている学校が多いと思います。ただ2時間だけしかやらない学校もありましてその中でいかにそれを伝えるかということに苦勞しながらやっているというのが現状であります。以上です。

**内藤：**どうもありがとうございました。それでは最後に車さんよろしく申し上げます。

**車：**田中さんのコメントはよく理解できました。実は田中さんは朝鮮史を専攻しているということで私の論文を理解しておりますし、私の論文を翻訳してもらったんですね。その翻訳が素晴らしかったんですよ。120パーセントの翻訳です。私は満足しております。

田中さんが理解しているように、韓国人はポリティカル・アニマルです。フランス革命に対しても政治的な意味を強調しています。特に韓国人は民主化、市民の権利、自由、このような用語に心を惹かれました。私が大学生の時は革命という言葉を知ったらフランス革命を意味し、そのような革命に対する憧れが大学生の中で存在していました。韓国はそのような学生達がポリティカル・パワーをもつような社会になって民主化されました。だから韓国人はフランス革命に対し

て感謝しなければならないと思います。問題はこれからです。これから韓国人は政治よりは平等とか友愛、そのようなことが必要になってきたのです。男女の平等、貧富の格差、障害者問題、フランス革命の精神を忘れてはいけないのに韓国人はフランス革命史を勉強しないんですね。これは大きな危機です。フランス革命の精神を忘れないで、いまでもフランス革命が進行中であることをもう一度喚起して勉強することが必要だと思いますし、そのような勉強によってアメリカニゼーションすなわちアメリカによる世界の弊害を中和させることになります。色々勉強になることが残っているのに勉強しないことが韓国人の問題だと思います。これから韓国の歴史教育でもう一度、フランス革命史に対する教育を復活させること、また日本の教育者にもそのようなことを助けてもらって、訴えるということ、これは私たち教育者の使命である。なぜなら韓国人と日本人は今までフランスについてたくさん勉強しました。これからはフランス人も韓国と日本のことを勉強しなければならないし、その意味でも互いに協力して韓国のフランス革命史教育の復活をめざして協力しましょう。

**内藤：**どうもありがとうございます。これから昨日から持ち越された問題、それから昨日と今日のフロアから出して頂いた質問、それにかかわるお話をして頂きたいと思います。ただその前にわれわれシンポジウムの主催者側の立場を申し上げさせて頂きますと、昨日出された問題、質問に出てくる問題のなかのいくつかはフランス革命の評価そのものに関わる大変重要な問題だと思いますが、このシンポジウムのテーマ自体が各国における歴史教育の中でのフランス革命の取扱いということで、本来ならばもっと時間をとってそういう大きな問題も取り組まないといけないと思うのですけれども、時間の制限もありますので、どちらかといえば歴史教育という側面に話題を寄せてお話しして頂きたいと思います。いくつか頂いた中で今日いらしてない方もいらっしゃると思いますので、お答え頂くと言うことは無理かと思いますが、そのなかで我々の方でこれについてはどうであろうと思うようなものをいくつか選ばさせて頂きましたので、それをご紹介して関係のある方にお答え頂きたいと思います。最初は大野豊子さんという方、今日いらしておりますでしょうか。頂いた質問というのは人民主権という意味において、フランス革命におけるジャン＝ジャック・ルソーの評価がどのような変化をたどっていったのであろうか。そういうことでよろしいでしょうか大野先生。これについて、特に日本と中国の報告者からお答え頂きたいということなのですが、楊さんいかがでしょうか。

**楊：**中国の歴史の教育においてルソーは非常に重視されており、非常に高く位置づけられています。ジョン・ロックなどの思想に比べても重視されております。私の理解では特にこの点について注意を促したいのですが、ロック、ルソーは学者として同じ分類に属すると思いますが、しかしながら私の理解では差異があると思うのです。ロックは次の点を主張しています。全てが人権を持つのだと。ルソーは私の理解では多数者が権利を持つのだということを言っております。それは私の理解に過ぎないのですが、ロックは全ての人の人権を主張している、ルソーは人民の権利というものを主張していたのだと思います。西側がロックを擁護し、東側がルソーを擁護したということだと思います。西では例えばイギリス革命、あるいはアメリカの憲法など見て頂いても、全ての権利、全員の権利ということが主張されています。東においては違うと思います。東において、ルソーはロックよりも非常に高く評価されています。中国もそれに追随したというこ

とです。つまりルソーが賞賛されているということです。ルソーは多数の権利を唱えました。社会においては大体貧しいものが多数です。富めるものは少数なのです。東にとってはこちらを主張する方がより都合がいいわけです。そういうことで中国そしてソ連におきましてはルソーが高く評価されていて現在でも我々の教科書の中ではロックの場合には1~2行しか書かれていないのですが、ルソーに関しては非常にたくさん書かれております。中国にとっては革命理論がそもそもルソーに起源を発するというものですから、貧しいものが権利を持つ、つまり豊かなものから権利を剥奪する権利があるという考え方です。西洋におきましては全ての人が権利を持つのだということ、つまり富めるものばかりでなく貧しいものもすべてが権利を持つ、それが平等であるというのが西洋の考え方だという風に思います。ありがとうございました。

**内藤：**どうもありがとうございました。松本さん短くお願いします。

**松本：**非常に難しい問題ですが、歴史の教科書では手元に柴田先生の書かれた山川の『新世界史』というのがあるのですが、第14章、欧米近代社会の展開というところの最初がこの啓蒙の時代から始まっておりまして、そのなかでまず啓蒙思想が紹介されて、それがアメリカの独立革命、フランス革命というかたちの編別構成になっております。ただこれは他の教科書も全部こうとは限りません。それで教科書の中でルソーというのがどう描かれているかですが、アンシャン・レジームの末期いわゆる啓蒙主義思想というのが特にフランスを中心にして出てきたという記述、そして具体的にはフランス革命史の中でそれが人権宣言に反映されていく、あるいは1793、94年の段階で理性の崇拜とかあるいはメートル法だとかそういう形で啓蒙主義の考え方というのが政策として実現されていく、そういうようなところから出てきていると思います。ロックに関しましては、教科書のレベルではアメリカ独立宣言の基本的な思想としてロックの思想の影響を非常に強く受けて、これが制定されたというかたちで書かれていると思います。私たちとしましては、思想は思想だけということではなく歴史的な事件、革命色々な事が起きるわけですが、その背景としてその背後に流れている思想について語っていきたいと思っておりますので、フランス革命の授業の中では必ず触れるようには致しております。以上です。

**内藤：**どうもありがとうございました。次の質問ですけど、これは二村美朝子さんから頂いたものです。昨日何度かお話に出ましたけれど、フランス革命は非常に普遍的な要素を持っており、そういったフランス革命についてそれぞれの国の歴史教科書や歴史教育の中でどの側面が、あるいはどの要素が主として重視されて書かれ、教えられているか、人権問題とかナショナリズムとか近代化の問題、その点をひとつは政府、国のレベルでどのような方針が歴史教育の上で示されているか、それから学者、研究者の動向はどうか、三つ目は現場で歴史教育を行っておられる中学校、高校の先生の立場からどうかという三つの側面でフランス革命の重要度についてお聞きしたい。ただ先ほどの松本さんのお話で日本の状況はお話し頂きました。それからムカージーさんの報告の中でもどちらかというとなガティブというか特に特定の問題について重点的に教えられているということではないんだと私は理解したんですけどよろしいでしょうか。あるいは皆さんにそれぞれのお国についての事情をお話して頂きたいと思います。もし何かあるようでしたらお答え下さい。ムカージーさんからお願いします。

**ムカージー：**フランス革命のどの側面が強調されているかという点ですが、政府の方針、例えば

国家の教科書認定機関について申し上げました。その場合には平等ということが政府レベルで強調されます。現在、ナショナリズムというのは全く触れられておりません。さて学者、研究者の動向ですが、それは民主主義が強調されています。民主主義から発生する市民とか、あるいは民主主義です。それから、一般的に教科書について申しますと、今申し上げたようにあまり扱っていないわけです。ですから、高校では200ページの西洋と東洋を含む世界史の内、4ページのみが革命に充てられているということでおわかり頂けると思います。

**楊：**皆さん中国の教科書のコピーが手元にあると思うのですが、注意して頂きたいのはこの章が一つの部分から構成されているということです。最初の部分はフランスのブルジョワ革命、そして2番目の部分は、これはこのなかに印刷されていないのですが、ナポレオン帝国という部分です。しかしながら中国におきましては通常二つの章として分けております。ひとつはフランス革命の章。そしてもうひとつはナポレオン帝国の章として扱っていたわけです。現在は二つ一緒に扱っております。ナポレオン帝国はフランス革命の一部であるという考え方のもとに従来分けていたものを両方合わせて教えています。理解としてはルイ16世の時代とナポレオンの帝国の時代の違いというのは、後者の時代では国民国家になったということであります。中国の歴史の教育におきましては、イギリス革命およびアメリカの革命は政治的な革命として見られています。フランス革命は社会革命としてみられています。そこに違いがあります。ありがとうございました。

**ラム：**フランス革命史を教える場合は革命に有意性と同時に当然その限界があるということを教えています。フランス革命の精神性はそれ以降の革命に大きな影響を与えたと思います。ヴェトナムでは政府、各研究者、各学校教育において、基本的にフランス革命史は一つの基本方針で教えています。というのはヴェトナムの教育制度は政府から下の学校教育まで非常に緊密に結びついているからです。ただし、学生レベルにおいては当然フランス革命についてさまざまな意見がございますが、基本的に教師はそういった意見を統一しながら方向性をもって教えています。以前はフランス革命あるいはロシア革命については別物と教えておりましたが、現在はフランス革命の精神がロシア革命にも影響を与えるという連続性のもとで教えているとことを付け加えさせていただきます。ありがとうございました。

**車：**韓国において民主化以前の制度ではフランス革命を教えるときにも対外戦争とか愛国心、民族主義ということを強調しました。韓国も日本のように教科書を作るときに文部省からの何か指導要領があつて、その要領を見ると対外戦争とか愛国心、このようなことを強調しました。民主化以降は、そのようなことは問題となりません。そのことは注意して下さい。その代わりに今は国際理解などを強調しております。アカデミズムの方は、フランス革命の意味を再解釈する問題、それはいつも同じ問題ですけれど、それが持っている進歩性や社会主義との関連は今でも研究テーマとなっております。教育現場では自分の国の歴史、朝鮮時代と比較して封建体制の矛盾や民主主義の成立過程などを強調しています。韓国ではヨーロッパに旅行するのが流行っています。ヨーロッパ理解の次元でもフランス革命史に対する教育は重要ですが、今は行っていないのです。

**松本：**先ほど政府と研究者と教育との関係は申し上げましたけれど、教育の場で何を強調してい

るかといいますと一つは人権宣言の箇所だと思います。自由や平等の意味、それがこれから後の革命に非常に大きな影響を及ぼしていたということを語っています。ただそこには限界というものがあつたことも同時に話しております。もうひとつは礼賛するわけではありませんがいわゆるナショナリズムの問題、この問題は非常に難しい問題を含んでいるということ。確かに最初は防衛戦争的な意味を非常に強く持っていたことも事実ですし、フランス社会自体は非常に中央集権化されていきましたが、ただそれが途中からある面では侵略という形にでていってしまった。これは事実関係として一応伝えております。それでこの辺になると非常に難しいんですけども、そのナショナリズムをどう捉えるか、ナポレオンの対外侵略および大陸支配をどういう風に捉えていくのかということが歴史教育の現場では非常に難しいのです。事実を元にしてこういうことが起きたんだということ、それでその中からはやはり侵略された側から各国のあるいは各民族のナショナリズム運動が出てきているという、そういう形で話しているような気がします。強調している点としては自由・平等という理念、もうひとつはナショナリズムをどう捉えるかということを強調して話しているように思います。以上です。

**内藤：**ありがとうございました。次に西川正雄さんの方から世界史の中のフランス革命を考える上でナポレオン戦争期を視野に入れなければいけないのではないかと質問がありました。もうひとつ、本池立さんでしょうか。これは昨日積み残しになっていたフランス革命の時期区分といましようか、フランス革命の終わりをどこにもってくるかといった問題とも関わってくるのではないかと思います。それは昨日の議論で出ていたムカージーさんの方から、あるいは先ほどもありましたけれど革命の持つ非常に複雑な性格とも関係あると思いますし、楊さんから出された革命をどう定義するか、どう位置づけるかといった問題とも関わってくると思います。しかし先ほど申し上げましたように、フランス革命をめぐる非常に本質的な問題なので重要ではありますが、一応歴史教育との関わりを重視するというをご考慮頂きながら、昨日のフランス革命の終わりの問題、それからナポレオン戦争をどう組み込むのかといった問題についていくつかのお答えなり、ご意見を頂ければと思います。時間の問題がありますので非常に申し訳ないのですが、ムカージーさんの方からおこたえいただくことありますか。昨日のお話にあつたことですけど時期区分という問題からすればどうでしょうか。

**ムカージー：**これは昨日も話しましたが時期区分の問題は革命をどう定義づけるかということによって変わってくるわけですね。率直に言って私は答えを持ち合わせておりません。ナポレオン戦争期を入れるならばウィーンの最終的な休戦も含めた方がいいということになります。

**内藤：**いかがでしょうか。もしあれでしたら西川さんの方から何か。

**西川：**私のは質問でもないし、批判でもありません。特に今日の報告者の方々の話を伺っていると皆さん同じような考え方をもっておられるように思いますので、あまり詳しく申し上げる必要はないと思います。私の問題提起と申しますのはフランス革命の時期をどうとるかというのはそれぞれの立場から色々な考え方があつていいと思いますので、あまり時期区分について詳しい議論をする必要は無いと思います。特に私の場合には世界史に関心を持っておりますので、その観点からフランス革命をみる場合にはナポレオン戦争の時期まで入れて考えるのがいいのではないかと、そういう問題提起です。それと申しますのはラム先生の報告の中に「フランスの道は反フラ



ンスの道である」というのがありました。ヴェトナムの場合それが非常にはっきりと出ていると思いますけど、ヨーロッパに関してフランス革命の時期からナポレオン戦争の時期には例えばプロイセンあるいはイタリアなど見た場合に、反フランスの動きが非常に強くでてまいります。それにもかかわらず、このフランス革命の自由・平等といった精神を無視することはできない。そのような、言ってみれば逆説的な形でフランス革命が広がっていったと考えることはできるのではないかと思います。もしフランス革命をフランス一国の歴史の中だけで考えますと、フランソワ・フュレのように1789年の段階で実は社会経済的にはフランスの変化は済んでいた。後の時期の混乱は必要なかった、そういう解釈が出てくるんですね。ですからフランス革命を論じる場合にはフランス一国史のなかでみるのではなく、世界史のむしろ逆説的な動きの中でみることによって明らかになってくる面が多いのではないかと、そしてイギリスも同じような役割を果たしているのですが、イギリスの諸革命に比べて今言ったような意味ではフランス革命のメッセージの方がいってみればはるかに単純で明快であった。そのように考えます。

**内藤：**他にも質問を頂いておりますが、時間が無くなって参りましたので誠に申し訳ないのですがこれで質問は終わりにさせて頂いて、主催者側から青木美智男センター長にコメントをお願いします。

**青木：**昨日と今日のお話をお聞きしております、私が一番感じたことはやはり1945年の日本の敗戦、それからそれ以降のアジアの諸民族の解放、これを前後してやはりフランス革命に関する関心や理解が大きく変わったのではないかとということです。昨日、松本先生から日本の歴史教育の中のフランス革命について明治維新以降のいわゆる戦争前の段階の話伺いましたけれども、あれは日本の国民があのように西洋史を理解、学習してきたわけではない。1945年以前の日本の国民は80パーセント近く初等教育で終わっております。ですから、初等教育のなかで、初めの頃は万国史、世界の歴史を学んでおりましたが、大日本帝国憲法が成立して以降は万国史の教育はなくなって、日本の歴史の教育だけになります。ですから、非常に国粋主義的な、国家主義的な歴史教育を受けておりますので、フランス革命などということを知る国民はほとんどいない。これは多くのアジアの諸民族の場合も、私は昨日と今日のお話を伺って、ほとんど同じではないかと思いました。大半の国民は自分の歴史を初等教育で学んできた。ですから、1945年を境にして、日本の場合は敗戦以降の民主化、それからアジアの諸民族の場合は解放と独立という新しい動きを示した。この時に、民主化と独立、それから自由と平等、これらを掲げる動きに、フランス革命から学んだことは非常に大きな影響を与えたのではないかと思います。その時に、フランス革命は輝いて私たちのような普通の国民の目の前に表れたという風に考えます。それ以降のフランス革命の教育の歴史について見ると、実は国々の独立の過程や民主化の過程の中で教育の内容に大きな違いが生まれてきていると考えられます。ただ共通しているのはフランス革命がもった精神性だけはこの国々でも一貫して重視されています。これはどうしてかと言いますと、このことを除いてこれからの国々の歴史も、目指す人類の課題もこれを除いては何も語れないからです。そういうことで共通しているのではないかと思いました。私たちのこれからの研究課題からいけば、やはり歴史学の研究と教育との間をどうやって結びつけていき、さらに事実を深め、豊かなフランス革命史像を描いて、そして教育の中に、子供たちに反映させていくことが必要な

のではないかということを考えまして私たちの研究としてこれからやることがたくさんあるなど  
思いました。どうもありがとうございました。